罪と罰（内田不知庵譯）

北村透谷

青空文庫

沈痛、悲慘、幽悽なる心理的小説「罪と罰」は彼の奇怪なる一大巨人（露西亞）の暗黒なる社界の側面を暴露して餘すところなしと言ふべし。トルストイ、ツルゲネーフ等の名と著書に至りては吾文界に之を紹介するの功不知庵に多しと言はざる可からず。

けども、ドストイエフスキーの名と著書に至りては吾文界に之を紹

露國は政治上に立て世界に雄視すと雖もその版圖の彊大にして軍備の充實せる丈に、民人の幸福は饒ならず、貴族と小民との間に鐵柵の設けらるゝありて、自からに平等を苦叫する平民の聲を起し、壯烈なる剛腸屡ば破天荒の暴圖を企て、シベリアの霜雪をして自然の威嚴を失はしむ。

乳を混ぜざる濃茶を喜び、水を割らざる精酒を飲み、沈鬱にして敢爲、堅く國立の宗教を持し、深く祖先の業を重んず、工業甚だ盛ならざるが故に中等社界の存するところ多くは粗朴なる農民にして、思ひ狹く志確たり。然れども別に社界の大弊根の長く存するありて、壯年有爲の士をして徃々にして熱火を踏み焔柱を抱くの苦慘を快とせしむる事あり。佛人の如くに輕佻動き易きにあらず、默念焦慮して毒刃を懷裡に蓄ふるは、實に露人の險惡なる性質なり。

「罪と罰」は實にこの險惡なる性質、苦慘の實況を、一個のヒポコンデリア漢の上に直寫したるものなるべし。ドスト氏は躬ら露國平民社界の暗澹たる境遇を實踐したる人なり、而して其述作する所は、凡そ露西亞人の血痕涙痕をこきまぜて、言ふべからざる入神の筆語を以て、虚實兩世界に出入せり。ヒポコンデリア之れかなる病ぞ。虚弱なる人のみ之を病むべきか、健全なる人之を病む能はざるか、無學之を病まず却つて學問之を引由し、無知之を病まず、知識あるもの之を病む事多し。人生の恨、この病の一大要素ならずんばあらじ。

開巻第一に、孤獨幽棲の一少年を紹介し、その冷笑と其怯懦を寫し、更に進んで其昏迷を描く。襤褸を纏ひたる一大學生、大道ひろしと歩るきながら知友の手前を逃げ隠れする段を示す。

高利貸の老婦人、いかにも露西亞は露西亞らしく思はれ、讀者をして再讀するに心を起さしむ。居酒屋に於ける非職官人の懺悔？自負？白状と極て面白し。その病妻の事を言ひて、

「所が困つた事にア身躰が惡く、肺病と來てゐるから僕も殆んど當惑する僕だつて心配でならんから其心配を忘れやうと思つて、つい飲む、飲めば飲むほど心配する。何の事アねへ態々心配して見たさに飲む樣なもんで一盃が一盃と重なれば心配も重なつて來る」

何ぞ醉漢の心中を暴露するの妙なる。更に進んで我妻を説き我娘を談じ、娘が婬賣する事まで、慚色なく吐き出づるに至りては露國の社界亦た驚くべきにあらずや。而して其の再官の事に説き及ぶや、

「又た或時は僕が寢て仕舞つてからカテリーナ、イワーノウナは何だか嬉しくて堪らなくなつたと見えて一週間前に大喧嘩した事ア忘れちまつてア……フ……を呼んで咖※なんぞを馳走しながら荐りに色んな餘計を附けちやア亭主の自慢をする」

と女性の無邪氣なる輕薄を笑ひ、更に一旦與へたる財貨を少娘の筐中より奪ひて酒亭一場の醉夢に附するの條を説かしめ遂に再び免職になりし事を言ひ、

唯僕が心配でならぬは家内の眼——眼だ。殊に頬が紅を點した樣

になつて呼吸が忙しくなる。僕之を見るのが實に辛い。先生は家内と同じ疾のものが挑動つ時の呼吸を聞た事があるかネ。それはそれは堪つたもんじやない。

とその家庭の苦痛を白状し、遂にこの書の主人公、後に殺人の罪人なるカ……イ……を伴ひて其僑居に歸るに至る一節極めて面白し。

（五十六頁）人間實にくだらぬもの。と、この病者の吐く言葉の中に大なる哲理あり。下宿屋の下婢が彼を嘲けりて其爲すところなきを責むるや「考へる事を爲す」と云ひて田舍娘を驚かし、故郷よりの音信に母と妹との愛情を示して、然どもこの癖漢の冷々たる苦笑を起すのみなる事を示し、實際家を卑しむの念をあらはし、「でなくば生命を捨てんのみ。運命に服從し、百事を放擲し」、云々の語を發せしむるに至る。

「必然の惡」を解釋して遊歩場の一少女を點出しかの癖漢の正義を狂欲する情を描き、或は故郷にありしときの温かき夢を見せしめ、又た生活の苦戰場に入りて朋友に一身を談ずる處あり。第六回に至りて始めて、殺人の大罪なるか否かの疑問を飲食店の談柄より引起し、遂に一刹那を浮び出さしめて、この大學生何の仇もなき高利貸を虐殺するに至る。第七回は其綿密なる記事なり。讀去り讀來つて纖細妙微なる筆力まさしくマクベスを融解したるスープの價はあるべし。是にて罪は成立し、第八回以後はその罪によりていかなる「罰」精神的の罰心中の鬼を穿ち出でゝ益精に益妙なり。余は多言するを好まず。嘗つてユーゴのミゼレハル、銀器を盜む一條を讀みし時に其精緻に驚きし事ありしが、この書載するところ恐らく彼の倫にあらざるべし。余は不知庵がこの書を我文界に紹介したる勇氣をこよなく喜ぶものなり。第二巻の速に出でんことを待つ。

（明治二十五年十二月十七日「女學雜誌」甲の巻、第三三四號）

青空文庫情報

底本：「明治文學全集　29　北村透谷集」筑摩書房
　　1976（昭和51）年10月30日初版第1刷発行
初出：「女學雜誌　三三四號」女學雜誌社
　　1892（明治25）年12月17日
入力：石波峻一
校正：小林繁雄
2005年9月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

罪と罰（内田不知庵譯）

北村透谷

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/